（様式第1号）

研究No.（記載不要）	17 －学長－ 1

平成17年度配分　研究成果の概要

研究名	オーストラリアの都市におけるエスニック文化の多様性				
配分を受けた特別研究費	学長特別研究費　2200千円				
研究者氏名（代表者）	学部名	学科名	職	氏　名	共同研究の場合の分担
	文化政策	国際文化	助教授	池上　重弘	研究の統括、インドネシア人コミュニティにおける定住支援
共同研究者	文化政策	国際文化	教授	高田　和文	イタリア人コミュニティにおける演劇文化の現況
	文化政策	国際文化	助教授	岡田　建志	ベトナム人コミュニティにおける教育と文化活動をめぐる状況
	文化政策	国際文化	助教授	下楠　昌哉	多文化都市メルボルンの民族表象

発表の方法	1　紀　要　別紙参照	号　数	第　6　号（平成18年3月発行）
	2　学会等での発表 学会等名：　詳細は別紙参照 オーストラリア学会（下楠） 文化政策研究大会（池上）	発表日（発表予定日）	平成17年6月12日 平成17年11月13日
	3　その他 発表の方法：　別紙参照	発表日（発表予定日）	平成　年　月　日

注：配分を受けた翌年度の6月末までに提出

（研究の目的等）

こんにち、社会の多文化化は世界各地で進行している。本研究では、このような状況に鑑み、21 世紀の都市の魅力を考える上で、その文化的多様性に関する考察を欠かすことはできないという観点に立った。ここでは、多文化主義の国オーストラリアの都市に着目し、そのエスニック文化の多様性を明らかにする作業を通じて、21 世紀における都市文化の可能性を探ることを目的とした。

申請者らの従来の研究対象地域（アイルランド・イタリア・ベトナム・インドネシア）はオーストラリアへの移民・難民の出身地でもある。これらはヨーロッパ系・アジア系双方を含むとともに、この順序でオーストラリアへの定住の歴史の古い方から新しい方までをカバーし、多文化主義採用以前から以後までの歴史にも対応している。

（研究の実施方法等）

オーストラリアの多文化状況全般を踏まえた上で、移民・難民としてオーストラリアに到来した複数のエスニック集団を対象に、都市におけるエスニック集団の実情について研究した。その際、社会全体における諸エスニック集団の位置付けやエスニック集団相互の関係を視野に入れつつ、移民・難民の生活実態と文化表象という2つの側面について、日本国内において文献収集・資料分析をすすめるとともに、8月下旬から9月中旬にかけて池上・高田・下楠の 3 名がオーストラリアを訪問し、シドニー・メルボルン等において調査を行った。

池上は多文化施策全般およびシドニーにおけるインドネシア系住民のコミュニティの調査を行なった。インドネシア系住民については、永住権を持つ比較的年長のインドネシア系住民に対するNGO等による定住支援活動の調査、および、インドネシア系永住者の子どもたちを対象とした補習校の実態と子どもたちのアイデンティティに関する調査を中心に、ヒアリング・参与観察を行なった。

岡田はベトナム系住民コミュニティの様態を把握するための統計資料の分析と、教育やアイデンティティをめぐる文献調査に主として従事した。

高田は、シドニー・メルボルン等のイタリア系住民のコミュニティにおける文化の状況を調査した。とりわけ演劇文化の実情に焦点を合わせて調査し、オーストラリアの演劇界におけるその位置付けとイタリア系住民にとっての演劇文化の意義を明らかにして、演劇の持つ文化的な意味を新たな角度から考察した。

下楠は、多文化都市メルボルンを描き出す文学者の作品を研究対象とした。メルボルンの歴史の神話化を小説で試みたアンドリュー・マカン氏の作品の翻訳出版を目指して作業を進めると同時に、メルボルンの文化的変遷や多文化状況に反応した諸作家の作品や活動を研究し、そこにおける民族的差異・文化的差異の表象の様態を検証した。

（得られた成果等）

池上と高田のオーストラリアでの現地調査は、英語を媒介言語とする調査では探りきれない実態を把握するうえで成果があった。池上の研究成果の一部はすでに本学紀要をはじめ各種の論文で発表されている。また、それらの成果・知見は政策提言系の会合でも紹介され、多文化化する日本社会の外国人政策・社会統合政策を考えるうえで参照されている。高田の調査でははじめての渡豪ながら豊富な人脈のつながりが開拓された。今後の調査の進展が期待される。下楠の研究成果については平成 17 年6月に同志社大学で開催されたオーストラリア学会で発表された。さらにそこでの発表内容をまとめた学術論文がオーストラリア学会の学会誌に掲載された。日本を代表する多文化都市・浜松から発信される多文化主義オーストラリアの研究は、学界・政府関係機関から注目されはじめている。

研究成果の実績報告の詳細

■１■　活字での発表

１．紀要

池上重弘. 2006. 「オーストラリアにおけるインドネシア系住民のプロフィール」『静岡文化芸術大学研究紀要』6:21－30.

２．学会誌等

Shimokusu, Masaya. 2006. Farewell to the Eastern Arcade: Modernity in A. McCann's The White Body of Evening.『オーストラリア研究(オーストラリア学会)』18:75－82.

下楠昌哉. 2006.「ボヘミアニズム」『英語青年』1887:34－35.

池上重弘. 2006.「多文化社会と教育－オーストラリアの経験を中心に－」財団法人地球産業文化研究所『平成 17 年度「多文化共生社会を考える」研究委員会報告書』pp.89-99.

池上重弘. 2006.「オーストラリアの多文化主義とインドネシア系住民による「コミュニティ言語」教育－シドニーにおけるコミュニティ言語学校を中心に－」『文化政策研究大会 2005 報告書／論文集』pp.127－138.「文化政策研究大会 2005in 浜松」実行委員会／静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科.

■２■　学会等での発表

１．学会・研究会での発表

下楠昌哉.「イースタン・アーケードとの別離－A・L・マカン『黄昏の白い裸身』におけるモダニティ」第 16 回オーストラリア学会全国研究大会(2005 年 6 月 12 日、於同志社大学)

池上重弘.「多文化社会オーストラリアにおけるインドネシア系住民の母語教育」文化政策研究大会 2005 分科会Ⅱ－A 多文化社会と文化政策(2005 年 11 月 13 日、於静岡文化芸術大学)

池上重弘.「オーストラリア、シドニーにおけるインドネシア人コミュニティと自助組織」神田外語大学異文化コミュニケーション研究所共同研究プロジェクト「日本のインドネシア人社会」第2回公開ワークショップ『インドネシア人移民の国際動向－オーストラリア、東アジア NIES、日本の現在－』(2006 年 2 月 4 日 於 TKP 四谷第2会場)

２．政策提言系の会合での発表

池上重弘.「多文化共生に向けての国・県・市町村・NPOの役割－オーストラリアの多文化共生施策を参考に－」第3回「外国人集住都市会議」群馬・静岡地域ブロック会議 講演(2005 年 12 月 15 日、於浜松市東京事務所会議室)

池上重弘.「オーストラリアの多文化主義から何を学べるか」「多文化共生を考える」研究委員会講演(2005 年 12 月 22 日、於(財)地球産業文化研究所会議室)

■３■その他

高田和文、2005 年 10 月 20 日、静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科「文化特論」の授業において報告、「オーストラリアのイタリア系社会とその文化活動」

ボヘミアニズム

外国文学研究者としては、自分が主として研究対象とする国の文学作品群をひとつの総体としてとらえ、それに肩入れしないでいるのは難しい。昨年ケルトとアイルランド文学のつながりをいったん保留にし、アイルランド縁の作家の作品を読み直す試みをしたが、それとて結局「アイルランド文学」という枠組みを fortify する営為ではないかと問われれば、黙って首肯するしかない。

2004年にオーストラリアはメルボルンでインタビューしたある作家は、単一の土地における単一の民族のための国民文学という概念を時代遅れと断じてこう述べた。「今興味があるのは、国境を越えて移動して行くような語りだ。ひとつの国家の枠組みに安寧として収まってしまう体験ではなく、地理的にはすっかり断片化してしまったような経験と関わりあってゆくような語りさ」

その「国境を越えて移動して行くような語り」のひとつがどうやらボヘミアニズムらしいと察して、昨年はボヘミアニズム関連の書物を渉猟した。すると、2004年に各方面から、この「国境を移動して行くような語り」の関連図書が出版されていることに気がついた。

まず19世紀半ばに芸術家としてのボヘミアンのイメージを決定付けた Henri Murger の小説の英訳 *The Bohemians of the Latin Quarter* (University of Pennsylvania Press)。英訳そのものは1901年出版のものだが、Maurice Samuels による序文は2004年の出版のためのもの。ボヘミアンが、自らが毛嫌いしたブルジョワジーと実はコインの裏表であると論じられている。

最近、批評用語辞典の邦訳が出た Peter Brooker は、*Bohemia in London: The Social Scene of Early Modernism* (Palgrave) を出版。ロマン派やヴィクトリア時代のボヘミアンのイメージを受け継ぎつつ、ロンドンに国境を越えて集結し、時代の変化に反応してさまざまに姿を変えたモダニスト・ボヘミアンたちの群像を描き出している。第一次大戦の終結後、彼らの運動が下火となったのを受け、この著書が主にカバーする年代は1908年から1920年。Eliot と Joyce の大作は、また別の文脈というわけだ。この著作では、国籍不明の "European" として登場する Wyndham Lewis の姿にインパクトがある。ただ Lewis に関して Brooker は、*Tarr* をはじめとする創作作品を当時の時代の様子を伝える文献として、回想録や自伝と同じ扱いで次々に引用する。賛否ある論の組み方だろうが、ボヘミアン芸術家のイメージ史の決定版、Elizabeth Wilson, *Bohemians: The Glamorous Outcasts* (I. B. Tauris, 2000)で論じられているように、ボヘミアン芸術家たちは、自作のボヘミアンの生活を実生活でなぞってしまったりと、自らの芸術と生活が分かちがたく結びついてしまっている事例が多いのも確かだ。

Wilson の著書では、おそらく最初のボヘミアン芸術家のイコンとなった人物として、George Gordon, Lord Byron が挙げられている。2004年には Byron のヴィクトリア時代の文人たちへの影響を論じた Andrew Elfenbein の *Byron and the Victorians* (Cambridge University Press, 1995) が、ペーパーバック版で再版されたのも目をひいた。

19世紀後半のオーストラリアを代表する作家にしてジャーナリストの Marcus Clarke の作品や記事に現れる植民地のボヘミアン的な要素に着目したのが、同じく2004年出版の Andrew McCann, *Marcus Clarke's Bohemia: Literature and Modernity in Colonial Melbourne* (Melbourne University Press)。McCann は、Clarke の筆が追ってゆく "cosmopolitanism, dislocation, itinerancy, and vagabondage" に、オーストラリアの大地における単一民族に統一された国家という政治的幻想の不可能性の先触れを見る。そして、私に「国境を越えて移動して行く語り」について語ってくれたのが、誰あろうこの Andrew McCann メルボルン大学助教授(当時)であった。次回は、彼の創作作品について紹介したい。

——下楠　昌哉

『英語青年』2006年5月号より